

2021年5月21日

第24回「信用金庫社会貢献賞」の受賞活動決まる！  
— 「近居・住替え促進事業『巡リズム®』」 —  
枚方信用金庫（大阪府）が会長賞に

一般社団法人全国信用金庫協会

全国信用金庫協会（会長：御室 健一郎）が実施している、信用金庫業界の顕彰制度第24回「信用金庫社会貢献賞」の受賞信用金庫、個人賞受賞者がこのほど決定いたしましたので、お知らせします。

第24回「信用金庫社会貢献賞」受賞活動

賞の種類	信用金庫名（都道府県）	受賞活動名
会長賞	枚方信用金庫（大阪府）	近居・住替え促進事業「巡リズム®」
Face to Face 賞	あぶくま信用金庫（福島県）	震災から10年の「福島の今」を発信
	越前信用金庫（福井県）	カーブミラー清掃活動
	静清信用金庫（静岡県）	コロナ禍でのつなぐ、つなげる地域支援
個人賞	柏崎信用金庫（新潟県） ばば やすひろ 馬場 康博 氏	語り継ぐ郷土史、子供達と地域社会へ
	八幡信用金庫（岐阜県） さわ なおや 澤 奈央也 氏	地芝居による地域活性化への取り組み
	長浜信用金庫（滋賀県） たがわ ゆたか 田川 豊 氏	長浜柔道協会における柔道の指導
地域活性化しんきん 運動・優秀賞	新庄信用金庫（山形県）	国産落花生の新産地化活動と人材育成
	足立成和信用金庫（東京都）	「お菓子の街あだち」で街を元気に

本賞は、地域に生まれ、地域と共に歩む信用金庫が、様々な分野で地域貢献・社会貢献活動を実践している真摯な姿を多くの方々にご覧いただきとともに、地域における存在価値を一層高めていくことを目的に、1997年に創設いたしました。このような、地域に根ざした永年にわたる信用金庫の地道な活動に光を当て、これを顕彰することは大きな意義があると考えております。

今回は、昨年10月から12月までの募集期間に、164信用金庫・4関係団体から562件の応募がありました。その活動内容は多岐にわたっており、環境保全や社会福祉、金融教育支援、高齢化社会への対応のほか、東日本大震災からの復興支援、地域活性化への取り組み、次世代経営者の育成、取引先の販路拡大策など、どれも地域に根ざした信用金庫の不断の努力と叡智を結集したものとなっています。選考委員による厳正な審査の結果、会長賞をはじめとする受賞6信用金庫、個人賞受賞3名の活動が決定いたしました。

-----  
 <参考> 第24回「信用金庫社会貢献賞」応募状況

地区別応募状況

地区名	金庫・団体数	応募件数
北海道	13	41
東北	18	31
関東	31	95
東京	12	54
北陸	9	16
東海	27	114
近畿	24	120
中国	11	41
四国	5	7
九州北部	5	17
南九州	9	21
団体	4	5
合計	168	562

活動分野別応募状況

活動分野	応募件数
地域社会活動	376
スポーツ	58
社会福祉	23
芸術・文化	31
教育	26
環境	35
災害救援	7
史跡・伝統文化保存	6
合計	562

本件についてのお問合せは、全国信用金庫協会 広報部 小曾根、今林、鈴木(拓)、袴田、野村(TEL.03-3517-5722 FAX.03-3517-5792)までお願いいたします。

## 第24回「信用金庫社会貢献賞」の選考総評と受賞活動の概要

### 1. 選考総評 震災後10年・コロナ禍を乗り越える諸活動

選考委員 村本 孜 氏（成城大学 名誉教授）

新型コロナウイルスで終始した感のある2020年度であったが、2020年度もFace to Face賞には134金庫・320活動、個人賞には34金庫・48活動、地域活性化しんきん運動・優秀賞には93金庫・194活動の応募があった。延べ261金庫・562活動である。2019年度より多い応募数であった。この多数の応募から受賞活動を選ぶのは容易ではなく、ほぼ同列の中から選考となるので、今回、惜しくも受賞を逸した信金・活動も多い。そこで、継続して応募されることを期待したい。特に、個人賞には長年にわたる活動が目白押しで、甲乙を付け難い活動が多い。諦めることなく応募していただきたいと思う。

従来、Face to Face賞、地域活性化しんきん運動・優秀賞の選考は選考委員の評価が異なり、多岐にわたることも多く、収斂するまで議論が活発に行われることが多い。ところが、2020年度は、2019年度と同様、入賞した活動について、多くの選考委員が等しく支持する結果であった。いわゆる衆目の一致する活動が受賞した印象がある。

コロナ禍を反映して、それに呼応した活動で、印象深いものはいくつかあった。また東日本大震災10年の節目にその影響を風化させない活動も見逃せないものであった。内閣官房まち・ひと・しごと創生本部の「地方創生に資する金融機関等の『特徴的な取組事例』」に選考され、内閣府特命担当大臣（地方創生大臣）の顕彰を受けた活動も含まれており、それらが普遍的な活動であることを示している。

2020年度の受賞活動の特色は、必ずしも長期にわたるものばかりではないということ、あるいは特徴的な取り組みが多かったということであろう。会長賞の枚方信用金庫の活動は、高齢化社会における空き家などの住宅問題を人が巡り住むことをコンセプトに、地域での住宅循環・空き家化の防止・若者の婚活・子育て支援など多岐にわたる地域活性化を行い、融資件数・金額にも寄与するもので、選考委員がほぼ一致して会長賞に推した。

Face to Face賞のあぶくま信用金庫の活動は震災10年を踏まえ、ガイドブック・伝承館・プロモーションビデオなどにより信金ネットワークを通じ、福島の今を情報発信している。越前信用金庫のカーブミラー清掃活動は、雪国らしい地元貢献で、若手職員主導の下で全役職員が参加する信金らしい活動である。静岡信用金庫の活動は、コロナ禍で信金が地元の商店等の取引先をいかに支援するかの一つのモデルを示している。2019年度の選考所感で、「新型コロナウイルスの流行拡大が懸念されており、地域の観光業を始め、商店街等が影響をこうむり、地域経済の不振がその後顕在化しているかもしれない。このような時期だからこそ、信用金庫の本業が重要になる。相互扶助の精神を基礎に、地域の価値を高めて、共に協力・連携していくことが求められる。そのような活動が次年度以降の社会貢献賞に応募されることをおおいに期待」と書いたが、まさにその手本となる試みである。

個人賞は、活動期間も長く、地元貢献する活動が目白押しということで、今回もおおいに悩んだが、活動内容の独創性・秀逸性なども加味して選考した。選考枠がもっとあればとの感があり、引き続きの応募を期待したい。

地域活性化しんきん運動・優秀賞も秀逸な活動が多かったが、新庄信用金庫と足立成和信用金庫の活動は地元を如何なる方向で活性化させるかというコンセプトが明確で抜きん出た感がある。

個人的には、越前信用金庫の20余年にわたる一見地味な活動が印象に残った。信金の持つヘッドワーク・ネットワーク・フットワークのうち、フットワークを全役職員で実行している点が素晴らしい。国土交通大臣表彰を受賞しているのも宜なるかなである。

このところ、西日本エリアの信金の応募が少ないようだ。是非、遠慮なく応募していただきたい。全国の信金にブロンズ像が飾られることを祈念している。

## 2. 受賞活動の概要

### 【会長賞】

#### 枚方信用金庫（大阪府）／近居・住替え促進事業「巡リズム®」

枚方信用金庫の主要営業エリアである北河内7市（枚方市、寝屋川市、交野市、大東市、四條畷市、守口市、門真市）では、高齢化・核家族化が進んでいる。そのため、高齢者が自宅を放置したまま介護施設に入居してしまい、空き家や遊休不動産の増加が地域の課題となってきた。そのような中、枚方信用金庫の「巡リズム®」は、2015年に地方創生の取り組みとして、高齢者が所有する不動産を子育て世代に流通させる「人が巡り住む」仕組みをつくり、街の活性化と住環境の維持を図る近居住替え促進事業としてスタートした。

2016年には、北河内7市および京阪電気鉄道㈱（現京阪ホールディングス）、関西医科大学と包括連携協定を締結。翌年にかけて、金庫職員が高齢者宅を訪問し、将来の住まいや暮らしについて聞き取り調査を行った。聞き取り調査で集められた約1万8,000件の声を分析し、多様なお困り事を解決する受け皿となる不動産や建設の業者・介護施設などと、ビジネスマッチング契約を締結するに至った。

今では、毎月の集金時に高齢者を無料で見守るサービスを行うことで、多様な相談を受けながら、外見や対面による確認を行い認知症等の早期発見につなげており、ウェアラブル端末を活用した見守りサービスも開始した。高齢者向け施設などへの住替え支援では、住替え時に自宅を売却するなど若者世代に地域資源とサービスをつなげている。他にも、地域の方が集い語り合えるフリースペースの創出、研修所を地域の小規模保育施設へ実質無償貸与、婚活パーティーの開催など、地域で働く若者の婚活や子育ても応援している。

また、「北河内7市地方創生活活性化会議（K7サミット）」を2016年から毎年1回開催。自治体などのリーダーと地域課題を共有し、意見交換を行っている。2021年3月31日までに延べ1,118億円（5,849件）の融資を実行。行政や地域事業者と連携した「つなぐ、つなげる、つながる」活動を通して、多様な世代が共存するまちづくりを展開し続けている。

---

### 【Face to Face 賞】

#### あぶくま信用金庫（福島県）／震災から10年の「福島の今」を発信

東日本大震災（以下、震災）から10年。あぶくま信用金庫では、震災と東京電力福島第一原発事故（以下、原発事故）発生直後、多くの職員が避難を余儀なくされ、退職した職員も少なくない。多くの店舗が営業休止を余儀なくされたが、残った職員の奮闘により、他の金融機関に先駆けて順次店舗の窓口を再開した。

震災および原発事故で失われた産業の回復にはまだ時間を要するが、新たな産業の創出と産業基盤の構築に向けた取り組みが進展している。一方、震災や原発事故の被災地への関心が薄れる「風化」が進み、さらに福島には根強く「風評被害」が残っている。

こうした中、あぶくま信用金庫は「どんなに時間がかかっても復興を成し遂げ、持続可能な地域社会を実現すること」が、地域に根ざす協同組織金融機関の責務と考え、その思いを形にした。風化防止と風評被害払拭、そして、交流人口の増加を図るため、「震災発生から10年の節目を迎える福島の今」を伝える地域魅力ガイドブック『福相双』（以下、ガイドブック）を制作。視察旅行のモデルコースや、地域の魅力を伝える内容となっており、信用金庫のネットワークを生かして全国から誘客を進めている。

活動を開始した2019年は、翌年にJヴィレッジでの聖火リレーのスタート、福島ロボットテストフィールドの開所、東日本大震災・原子力災害伝承館の開館などが予定されている。

た。これらのイベントに併せて「福島の今」を発信することで、交流人口の増加が図れると計画した。

また、「福島の今」を伝えるだけでなく、震災発生からの歩みを後世に残すコンテンツも制作した。震災発生からの取り組みや、まちの未来への思いを語るプロモーションビデオを制作。語り手として、あぶくま信用金庫と地方創生に向けた地域密着相互連携協定を締結している8市町村の首長の協力を得た。

2020年ガイドブック完成発表会を開催。多方面から反響があり、寄贈や視察など広がりをみせている。

## 【Face to Face 賞】

### 越前信用金庫（福井県）／カーブミラー清掃活動

1997年、越前信用金庫の若手職員が中心となり「社会貢献委員会」を立ち上げ、何ができるかを検討する中で決まったのが、「カーブミラー清掃」だった。同金庫の営業エリアは積雪が多く、一冬越したカーブミラーの汚れがひどいことに着目した活動で、雪が溶ける春先に清掃を実施することで地域の交通安全につなげたいという思いからスタートした。

翌1998年から、毎年3月に行われているカーブミラー清掃には、全役職員117人が参加。大野市や勝山市、福井市にある12店舗周辺のカーブミラー約610か所を対象にしている。

そろいのユニフォームに身を包んだ役職員が、3人1組となって街中に出て、三脚や軽トラックの荷台に上り、カーブミラーにクリーナーを吹き付け、雑巾で磨く。この光景は、地域の恒例行事となっており、毎年のように地元紙・福井新聞でもその活動が報じられている。

参加する役職員にとっても、地域をより身近に感じ、貢献できる幸せを感じる良い機会となっている。営業店近辺のため、顔見知りも多く、地元の方から声を掛けられることもあるという。

地道な活動ではあるが、20年以上継続した努力が認められ、2019年8月には、公益社団法人日本道路協会から、道路功労者表彰を受けたほか、2020年8月には、国土交通省から国土交通大臣表彰を授与された。

大臣表彰を受け、越前信用金庫の松田浩次理事長は2020年9月、大野市の石山志保市長に受賞を報告。その中で、松田理事長は「地域貢献のために始めたが、気概を持って続けてくれた役職員に感謝したい。表彰を励みに今後も活動を続けたい」と話し、石山市長は「中部縦貫自動車道の整備が進む中、道路愛護活動を長年続けている団体がそのエリアにいるというのは心強く、喜ばしい」と応えた。

2020年は新型コロナウイルスの感染拡大防止のため活動を自粛せざるを得なかったが、2021年は例年通り実施し、カーブミラーをピカピカに磨き上げた。

## 【Face to Face 賞】

### 静岡信用金庫（静岡県）／コロナ禍でのつなぐ、つなげる地域支援

コロナ禍で売り上げの減少に苦しむ取引先の飲食店や小売店を支援するため、静岡信用金庫は、取引先の営業時間やお薦め商品、テイクアウト情報などをまとめたパンフレット『With Seishin』の制作を企画し、2020年4月に掲載先の募集を開始した。パンフレットは静岡市葵区版、駿河区版、清水区版、焼津市・藤枝市版の4種類があり、掲載先は500先を超えた。5月には役職員に対し、パンフレット掲載商品の購入を呼び掛け、静岡信用金庫からも購入費用を補助することで購買促進を図った。その結果、購入実績は1、

672件、1,594万7,543円（2021年3月31日現在）に達した。単なる購入支援にとどまらず、購入した職員の意見や感想を取引先にフィードバックし、商品開発に反映してもらうというユニークな取り組みも始めた。9月には『With Seishin』を静岡信用金庫のホームページに掲載し、取引先の支援を続けている。掲載した取引先は2021年3月31日現在で、640先に上っている。

取引先商品の購入支援は、静岡県東部の四つの信用金庫（三島・沼津・富士・富士宮）と連携する形でも実施しており、そちらの購入実績は計2,576件、289万8,800円となった。

また、静岡信用金庫では、地場産業の「茶業」を応援しようと、急須を使ったお茶の入れ方を紹介する「静岡の美味しい新茶の楽しみ方」の動画や、取引先企業の紹介を兼ねた子ども向けの「工場見学」動画などの配信も行っている。

さらに、地元自治体への協力として、預金契約額が静岡県の新型コロナ基金への寄付につながる懸賞品付定期預金を発売し、9月に同基金に100万円を寄付したほか、静岡信用金庫のキャラクターを活用して、マスクの着用や手洗い・うがいの実施など、新しい生活様式の呼び掛けを目的としたシールなども制作。このシール900枚をマスク2,000枚とともに12月に静岡市に寄贈した。このように様々な形でコロナ禍への取り組みを続けている。

---

## 【地域活性化しんきん運動・優秀賞】

### 新庄信用金庫（山形県）／国産落花生の新産地化活動と人材育成

2017年に米の生産調整（減反政策）が終了し、国の助成金が廃止となる中、山形県でも、米に代わる作物の導入が早急な問題となった。金山町は新たな作物として、米に比べると手間がかからず高齢者や女性でも作業が可能で、地元特産物のニラと比べても時間当たりの所得が高い落花生が注目された。国産落花生の需要が増えていることもあり、地元の豆菓子メーカーのでん六や、山形大学東北創生研究所と連携し、落花生の新産地化に向けた取り組みを始めた。

新庄信用金庫は、2018年6月に発足した生産者らによるグループ「金山町新産地開発協議会」と、「国産落花生の新産地プラットフォーム構築」事業を計画し、日本財団の「わがまち基金」助成事業に応募。2019年7月に1,000万円の助成金を受領し、これを活用して、産学官金連携による同町での落花生特産化を後押ししている。

新庄信用金庫は同時に、今回の事業を成功させるためには、地元の若者が自ら行動を起こすことや、それにつながる当事者意識の創造が重要であると考え、地元高校生、山形大生、新庄信用金庫の若手職員らによるワークショップを開催。地域の課題解決に携わる人材「ジモト・ソーシャル・イノベーター」の養成事業にも力を入れている。この事業は、地域の若者の地元農業に対する意識改革につながる効果や、地域活性化を図る主体同士の補完・相乗効果など、様々な狙いが込められている。

これらの取り組みは、金山町産落花生の商品企画をテーマに、地元高校生や山形大生らがアイデアを出し合うプログラムなどの形で実を結び、スイーツや調味料への活用といった具体的な提案がなされた。

さらに、障がい者の就労支援や高齢者の雇用を生み出す観点から、落花生の殻を手作業で剥く工程を「農福連携」により推進している。

諸々の取り組みが評価され、2021年5月には内閣官房まち・ひと・しごと創生本部の「地方創生に資する金融機関等の『特徴的な取組事例』」に選出された。

## 【地域活性化しんきん運動・優秀賞】

### 足立成和信用金庫（東京都）／「お菓子の街あだち」で街を元気に

足立区は1945（昭和20）年頃から、菓子製造業者の創業や区外からの転入により、都内の菓子工業組合所属の菓子製造業者の3割ほどが集積する「お菓子の街」となった。業界では有名な話だが、区民も含め一般的には、ほとんど知られていないことが課題だった。

そこで足立成和信用金庫は2017年5月、地元菓子製造業団体の代表、自治体関係者、大学教授を集め、「足立の菓子活性化会議」を発足させた。翌2018年1月まで22回にわたり会議を開き、「お菓子の街あだち」を広くPRすべく様々なアイデアを練った。

まず2018年2月、足立区の土産物としてお菓子をブランド化するため、足立成和信用金庫が主体となって地元の菓子製造業者15社でお菓子のブランド「あだち菓子本舗」を立ち上げた。

2019年11月には、足立区や商工会議所、足立法人会、西新井法人会の協力のもと、地元のショッピングセンター「アリオ西新井」でお菓子のイベント「あだち菓子博」を初開催。足立区ゆかりの22の菓子製造業者が参加し、2日間で約1万人の人出でにぎわった。

2020年には、コロナ禍で休校が続く小学生に「おうちでできること」を提供しようと、「あだち夢のお菓子コンテスト」を発案。このコンテストは、足立区在住の小学5、6年生を対象に、食べてみたい理想のお菓子を、イラストなどで表現して応募してもらうというもので、5月に作品募集を始めたところ、271件の応募があった。足立成和信用金庫職員による投票や、地元の菓子製造業者による審査を経て、7月に最終審査会を開催。9月に、表彰式と試作品のお披露目会を行った。そして、10月の「あだち菓子博2020」で、グランプリや準グランプリなど優秀作9作品を地元の菓子製造業者の協力で製品化して販売したところ、完売商品が出るほどの大盛況となった。コンテストは子どものためだけでなく、「菓子博」の盛り上げにもつながり、区内の菓子製造業者の支援にもなる、一石三鳥のイベントとなった。

---

## 【個人賞】

### 柏崎信用金庫（新潟県）馬場 康博 氏／語り継ぐ郷土史、子供達と地域社会へ

約150年前の戊辰戦争の際、現在の柏崎市では、飛び地として管轄していた旧幕府軍の桑名藩（三重県）と新政府軍との間で、「鯨波戦争」と呼ばれる激しい戦いがあった。戦後当地に駐屯した新政府軍は柏崎の市街地一帯を焼き打ちにする計画を立てていたが、地元の豪商・星野藤兵衛という人物が、現在の価値に換算して10億円以上の兵糧や軍事物資等を、私財を投じて提供する事と引き換えに戦火から町を守った。

柏崎出身で、1998年に柏崎信用金庫に入庫した馬場氏は、大学時代に日本史を専攻していたこともあり、地元の歴史を独自の観点で研究する中で、このあまり知られていなかった逸話を発掘した。鯨波戦争の実態や星野藤兵衛の活躍ぶりについての調査結果と、柏崎信用金庫が星野藤兵衛の自宅跡地に本店を置くことなど、当時から現在までのつながりを分かりやすくまとめ、2017年3月に「柏崎今昔物語」というレポートにして発表した。

以降、地元の小学校で継続的に特別授業を実施し、子供達に地域の歴史を伝える取り組みを行っている。また、地元企業団体の会合などでも10回を超える講演を行い、これらの活動は、地元紙・新潟日報の紙面でも何度も紹介されている。

## 【個人賞】

### 八幡信用金庫（岐阜県）澤 奈央也 氏／地芝居による地域活性化への取り組み

郡上市の明宝気良地区には、気良白山神社の祭礼日に、地域住民らが歌舞伎を演じる「地芝居」と呼ばれる伝統があったが、1980年代に途絶えてしまった。

同地区に居住する澤氏は、この地芝居を復活させたいと考え、2004年10月、当時20代だった同世代の地域住民約10人と共に、「気良歌舞伎一座」を結成。地域の理解と協力を得るために奔走すると共に、地芝居に携わったことのある地域の年長者や、郡上市内で唯一、地芝居を続けていた「高雄歌舞伎保存会」の協力を取り付け、翌2005年9月、17年ぶりとなる地芝居の復活公演にこぎ着けた。

以来、一座の中心的存在として活躍。2019年まで毎年、9月の神社の祭礼にあわせた定期公演で立役（男性役）や女形（女性役）として舞台に立ったほか、「高雄歌舞伎保存会」との合同公演も3回実施。岐阜県主催で2019年に開かれたイベント「夏の地歌舞伎公演2019」にも一座そろって出演した。

2020年はコロナ禍により観客を入れる形の公演は断念したが、無観客で地芝居を上演し、その内容を収録したものを、地元のケーブルテレビやYouTubeで配信した。地域外にも情報を発信する地域芸能の新たな取り組みとしても注目されている。

## 【個人賞】

### 長浜信用金庫（滋賀県）田川 豊 氏 /長浜柔道協会における柔道の指導

田川氏は大学までの柔道経験を生かし、1984年4月から30年以上にわたり、地元の長浜柔道協会で、小学生以上を対象に柔道の指導を行ってきた。

柔道の創始者、嘉納治五郎が唱えた「精力善用」「自他共栄」の理念のもと、「挨拶」や「礼儀」「思いやり」「感謝の心」の言葉を大切に、相手の痛みがわかる人間に子どもたちが育つことを第一に、指導を心掛けてきた。

また、試合の際は審判を務めるなど様々な大会の運営にも携わり、1998年からは長浜柔道協会の理事として会計を担当するなど、指導以外の分野でも尽力してきた。

2008年には、滋賀県柔道整復師会の一員として、韓国済州島で開催された「第10回韓・日親善交流少年柔道大会」に参加。

2018年には、基本に忠実な技の習得と、柔道の楽しさを教え柔道人口の減少に歯止めをかけることに貢献したとして、長浜市から社会体育功労者表彰と教育文化功績者表彰を受けている。

滋賀県では2025年に国民スポーツ大会が開かれ、柔道会場は長浜市が予定されている。この大会をはじめ、各年代別の全国大会や、果ては世界選手権やオリンピックまで、長浜から一人でも多くの選手を輩出できるよう今日も活動にいそしんでいる。

以 上

## < 参 考 > **第24回「信用金庫社会貢献賞」について**

【創設目的】 地域に生まれ、地域とともに歩む信用金庫の原点を踏まえ、地域の発展に貢献する信用金庫の真摯な姿を広くアピールし、お客様や地域の信頼を揺るぎないものとするとともに、地域での存在感を一段と高めていく。

【対象活動】 信用金庫にふさわしい地域に根ざした活動で、地域振興、社会福祉、芸術・文化支援、史跡・伝統文化保存、交通安全、教育支援、留学生・在日外国人支援、環境保全、各種ボランティア等の地域社会活動および災害救援活動等の分野とする。

【表彰対象】 ・信用金庫および信用金庫役職員（個人・グループ）  
・地区・府県信用金庫協会、中央団体

【選考基準】 活動の継続性（3年以上継続された活動であること。ただし、Face to Face賞の応募活動のうち、その特性から活動期間が必ずしも長期に亘らないもの、地域活性化しんきん運動・優秀賞は除く）、活動目的の社会的意義、地域との一体性（地域に溶け込んだ地域の方々と一体となった取組み）、活動の困難度、援助を受ける側の評価・感謝の度合い、関係者または地域社会に与えた影響、活動内容・方法のユニークさ、などを総合的に判断する。

【応募期間】 2020年10月1日から12月30日まで

【選考委員】 ※所属等は2021年3月現在、敬称略

石田	徹	日本商工会議所 専務理事
島田	京子	元 公益財団法人 横浜市芸術文化振興財団 専務理事
高橋	陽子	公益社団法人 日本フィランソロピー協会 理事長
野坂	雅一	総務省 地方財政審議会 委員
堀田	力	公益財団法人 さわやか福祉財団 会長
村本	孜	成城大学 名誉教授
御室	健一郎	一般社団法人全国信用金庫協会 会長
日沖	肇	信金中央金庫 副理事長
川本	恭治	一般社団法人全国信用金庫協会 広報委員会 委員長

【各賞の内容】

**会長賞**・・・活動の社会的意義、地域との一体感、地域社会に与えた影響等を総合的に判断し、Face to Face賞、地域活性化しんきん運動・優秀賞の受賞候補活動の中から最も優れた活動に対し与えるものとする。

**Face to Face賞**・・・地域金融機関にふさわしい、地域社会に溶け込んだ、地域の方々との一体感を深めることに寄与した活動および地域金融機関の社会貢献活動として今後の取組みが期待され、奨励される活動、ならびにその特性から活動期間が必ずしも長期に亘らないものであっても、環境・社会問題への取組み、災害復旧支援など関係者や地域社会に大きく貢献した活動等に対して与えるものとする。

**地域活性化しんきん運動・優秀賞**・・・中小企業のライフサイクルや経営課題等に応じた支援や地域経済の面的な活性化をめざす活動のうち、各々の地域社会の実情と信用金庫の特性に合わせたユニークで、他の範となる活動に対して与えるものとする。

**個人賞**・・・個人あるいはグループの取組みで、信用金庫職員として他の範となる活動に対して与えるものとする。